

「罪人を招くために来た」

—マタイによる福音書講解説教 43—

ホセア書 第6章 4節～6節
マタイによる福音書 第9章 9節～13節

説教 岡村 恒牧師

「わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」(13節)。その日、主イエスははっきりと神のご計画についてお話をされました。

〈時の人〉ナザレのイエスがやって来て、あろうことか、普通のユダヤ人なら近づきたくない人々の真ん中で食事をしておられます。人々は固唾を飲んでその場面を見ていました。この日、主イエスを迎えたマタイは取税人であり、町の通りにある収税所に座っていました。主イエスはこの日、マタイに出会い、弟子として召し、マタイの家に行って食事をするためにわざわざ進んで行かれたと思われれます。一人の人をご自分のものとして獲得するために、主イエスはいつでもピン・ポイントで進んで行かれます。

復活された主イエスは、エルサレムを脱出して、エマオの町に逃れて行く二人の弟子たちと一緒に歩いて行って、聖書の話しを語り聞かせ、福音をお示しになりました。弟子たちをお選びになった時も、網をつくるっている漁師たちの所へまで出かけて行って声をおかけになりました。この日も、いつもの日常のただ中で、収税所に座っているマタイのところへ、わざわざ出かけて行かれたのです。

「わたしに従ってきなさい」(9節)。唐突に、新しい人生に入るようにとマタイは招かれてしまいました。主イエスの言葉には、有無を言わずに人の人生を変える力があります。病気の人を立ち上げらせ、嵐をしっかりと静め、悪霊を追い出してこられました。マタイも、主の声を聞くとすぐに、収税所から立ち上がって主イエスに従い始めました。

パリサイ人という人々は、律法を守り、自分の身を汚れたものから徹底的に分離して、神に祈りを捧げることを一番大切にしていた人々です。その彼らには、主イエスが取税人たちと、話をするだけでもとんでもないことなのに、その家へ上がって食事まですることは、理解しがたいことでした。

主イエス・キリストは誰のために来たお方か。マタイによる福音書はストレートに、主イエスの口から出た言葉をもって、この問いに答えます。「わたしが来たのは、罪人を招くため」だと。招くというのは、単に呼びよせるといったこと

では収まらない言葉です。自分のものとして召し出し、一緒に生きるという話です。主イエスは、医者がいるのは健康な人ではない、私が来たのは病人のためだと言われました。マタイの食卓で主イエスは、罪人を招くために来たと言明し、躍り上がることを願う人々を癒して立ち上げらせる唯一の医者であることを表明されました。

「義人はいない、ひとりもない」(ローマ人への手紙 第3章10節)。そう聖書は明言しています。私たちは一人残らず、神との関係が壊れ、神の前に立ち上がることができない存在です。だからこそ、主イエス・キリストは来られました。主イエスが来られたのは、私たちを躍り上げて主に従うものに造り変えて下さる為です。主イエス・キリストが打たれた傷によって私たちは癒され(イザヤ書 第53章5節)、躍り上がって神の子として生きることができるようになりました。これが、聖書が語る福音です。

私は大丈夫だ、それなりに信仰を守り、一生懸命生きていると、私たちはしばしば思い込みます。しかし主イエス・キリストは、一度洗礼を受け、本当の命を得た者になお、それ以前にもまして死の病が襲いかかってくる現実をご存じでした。私が来たのはあなたのためだ、命を得たあなたが健やかに守られ、歩み続けるためだ、と言われます。復活された主イエスは、今も休むことなく働いておられます。私たち一人一人を本当の義人として造り変え、神の前に立たせてくださるために。

マタイの食卓よりはるかに大きなスケールで、はるかに大きな喜びに満たされた食卓が、神の国で実現します。その日その時私たちは、主イエス・キリストの口から聞くのです。〈私が来たのは、あなたをこの食卓に迎えるためだ〉と。主イエス・キリストを信じる信仰を告白して、罪の赦しの洗礼を受けた者は、一人残らずその食卓で主イエスの言葉を聞くこととなります。「私が来たのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである」私のため、あなたのために、主が来て下さったことを心から信じ、感謝し、その日を指折り数えて待ちながら歩みたいと思います。

(記 説教要約奉仕者)